
悪魔と愛の模様

零月零日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔と愛の模様

【Nコード】

N0584N

【作者名】

零月零日

【あらすじ】

「君に笑顔を届けられるのなら、僕は悪魔に魂を売り渡そう」
彼の願いは、実に些細な物。だが、彼が彼ではその願いすらも叶えられはしない。

『白雪家に歯向かう者は、奴らが飼っている悪魔に殺される』

国主の少女を主人に、悪魔は殺し尽くす。

その先に待つのは……。

序章

序章

どうして、僕はこんなにも辛いのだろう。
どうして、僕は涙を流しているのだろう。
悲しくなんか無い、全ては彼女のために。

彼女が必要ないものなら、それは世界が必要の無いものなのだ。
彼女が邪魔に思うものなら、それは世界に取って邪魔なものなのだ。

彼女が疎ましく思うものなら、それは世界に嫌われているものなのだ。

彼女が殺してくれと頼むなら、僕はそれを殺そう。
だけど、どうして、僕は泣いているのだろう。

??ああそうか。僕は嬉しいから泣いているのだ。
でも、それなら。

この心に突き刺さるような痛みは、一体なんだというのだろう。
分らないな、こんな痛み。

知られたくないな、見られたくないな、笑っていて欲しいな。
辛い、悲しくない、楽しくもない。

悪魔が笑っている。

僕は泣いている。

彼女は笑っている。

彼女は僕に普通に話し掛けてくれた。彼女にとっては、僕も一人の国民だった。

ただそれだけで、僕は救われた気がした。

その素直な笑顔を見ただけで、僕は幸せになれた気がした。
だから。

君に笑顔を届けられるのなら、僕は悪魔に魂を売り渡そう。

序章（後書き）

はじめまして。

これは作者の初作品で、感想や意見を教えていただけると嬉しいです。

第一章　く意地悪と悪戯　　1

第一章　く意地悪の悪戯　　1

「先輩、どうしたんですか？　青鬼にきな粉をかけたような顔色ですよ？」

「……何だよその比喻。ちょっとだけ寝不足なだけだよ」

「駄目ですよ、寝不足なんて。だから背が伸びないんですよ？」

「確かに僕はあまり背が高くないし、寝る子は育つと言っけど。これでも平均身長だから良い。それに、背が低い方が得な事もあるし」

「負け惜しみですね。例えば、なんですか？」

「鬼ごっこで小回りに動けるとか、かくれんぼで隠れる場所が増えるとか」

「先輩って、子供なんですね」

「……白雪って、意外と意地悪だな」

「そんなことは無いですよ？　ただ、事実と私の感想を言っているまでです」

「それが意地悪だって言ってるんだけど」

「じゃあ先輩は、心にもないお世辞を言ってほしいんですか？」

「背は大きくないけど夢は大きいんですね」とか『誇大妄想は良い事です』とか『先輩小さくて女装が似合いそう』とか」

「……白雪。褒めてないだろ、馬鹿にしてるだろ、確かに僕はそう言う人間だけど。女装が似合うという部分には全力を尽くして反対するがな」

「そうですか？　先輩の名前も女の子っぽいですよ。ミト、だなんて可愛いです」

「……えっと、男としては可愛いとかあまり嬉しくないんだけど」

「女としては？」

「僕は男だよ」

「またまた。先輩、きつと女装が似合いますよ。ミトちゃんなんて可愛らしくて良い名前じゃないですか」

「……………白雪。怒っても良いか？」

しかし内心では、女装という単語に安心していたりする。

男が女の格好をするから女装。白雪もちゃんと僕のことを男だと解っているじゃないか。

しかしあまり嬉しくない。女装が似合うとか、結構気にしているが、

「ふふっ、拗ねる先輩、ちょっと可愛いですね」

「……………」

ぐっの音も出ない僕がいた。どうにも小悪魔的な後輩だ。

……………悪魔は僕だろうに。

僕らは昼休み、学校の屋上で昼食を取った後、いつも通りにフェンスに凭れ掛かりながら話をしていた。フェンスが錆び付いていた場合の事は考えたくない。

僕らの通う学校は、訳ありの人たちを集めた学校で、人付き合いをするための場所ではない。訳あり、と言っても生活に困っている人向けの学校というのがメインだ。孤児や毎日の生活に困る程の収入しかない子供を多く集めている。入学に当たって必要なのは呼び名だけ。教えることは仕事に必要なものだけ。だから、名前も多少偽れたり。

先輩こと僕（ミト）。ミトという名前を心の底から捨てたいと望んでいる僕）は、先輩風に吹かれて後輩を氣遣う。

「白雪、そういうお前だつて顔色があまり良くないぞ？ 例えるなら、二日酔いでジェットコースターに乗った人みたいに」

「そうですね、疲れているんです。顔色だつて悪いんです。先輩ならもっと労ってくださいよ」

偉そうに上から物を言う白雪お嬢様。

後輩こと白雪（本名白雪奈美^{しひゆきなみ}）は、国を動かせる程のお嬢様。と言っより、国主。

そんな白雪に話しかけられて、冥利に尽きる握手握手やべえ今日は手洗えないや、とか思ってた事は一度も無い。僕はそういう権力に負けるようなことは言いたくない。

まあ、白雪に話しかけられて、僕の人生は転機を迎えたけど。

「はいはい、何か知らないけど頑張りましたね。で、何か困ってる事でもあるのか？ 僕で良ければ相談に乗るけど？」

露骨に悪そうな顔をする白雪。『悪そう』では語弊がありそうなのであえて言うが、悪魔の微笑とかでは無く、僕に対して悪いという気遣いが見える顔だ。

本当に優しい奴だ。その優しさで身を滅ぼしそうなくらいに。

「えっと、大したことじゃないんですけど??」

白雪はそう何か言いかけ、そして、

「??まあ、先輩みたいな庶民には解らない話ですよ。気にしないでください」

と無理矢理笑顔を作る。

「どうせ私はこの国の行く末を変えてしまうようなお嬢様で、先輩はどこにでもいるような一般人なんですから。私のことなんて、どうでもいいでしょう?? 返事はいりません。殺されてしまいますから……」

「……………」

僕は白雪のそういう台詞が嫌いだった。

『白雪家に歯向かう者は、奴らが飼っている悪魔に殺される』という噂が、白雪の人間関係を壊していた。

白雪がこの学校に入学したのも、それが理由だ。本名を名乗れば、たちまち敬遠されてしまうのだから。

だが、この学校に入学できたからと言って、普通の学校のような生徒同士の馴れ合いはあまりない。皆、自分が毎日を生きるのに精一

杯なのだ。

当然、白雪に同学年の友達はいない。以前の学校では仲良くなったも、白雪の事を知れば態度を変えてしまったらしい。白雪はそんな態度を望んではいないのに。

結果、白雪は自分を偽るようなことを言うようになった。最初から期待していない、と思うために。希望を見ないために。絶望を味わいたくないから。

まあ、この場では冗談で言っているのだろうが。

だけど、僕は冗談でも許せなかった。そんな悲しそうな顔が、僕は嫌いだった。

だから、僕は??、

「どうでも言い分けないだろ。そんな自分を蔑むような事を言うなよ。僕は??」

そこで、止まってしまった。僕は??、一体この先に何を言えば良いのだろう。

「先輩……」

白雪が僕を見つめている。考え込むことで、逆に白雪の視線が痛く感じるようになってしまう。言わない方が良いに決まっていると思う自分に腹が立つ。

でも??ごめんなさい僕は意気地なしですヘタレです。

しかし、次の白雪の台詞で僕のそんな思考は消し飛んだ。

「先輩は、私の事、どう思ってるんですか? ……私に、興味があるんですね?」

最初の質問必要ないんじゃない? とか口から出そうだけど、白雪と目と目が合っちゃって、口がパクパク動いちゃって、えら呼吸が出来なくて、頭が混乱して来て、白雪さんその確信したような言葉は一体なんですかその自白を誘うような言葉使いは卑怯です、と思った。

「……………」

結局、思っただけで、何も口から出なかったけれど。

「ふふっ、可愛いですね」

小さく小悪魔みたいに笑う白雪。

そして、腕時計を見て時間を確認。そろそろ昼休みが終わるよう
で、白雪は弁当を持って屋上の扉に向かいながら、付け加えるよう
にして、僕をちらりと見てこう言った。

「そんな先輩の事、私も少し気になってたり」

「えっ？」

では、と小さく会釈して白雪は校舎の中に消えて行く。

「……………聞き間違い、じゃないよな」

……………なんか、完全に負けた気がする。何に負けたのか全然わから
ないけど、この敗北感はなんとも言えない。

と、黒猫が僕の前に現れた。深い闇を思わせる真っ黒な黒猫。
なぜいるのだろうか？

「やっぱり、僕は白雪に弱いよな」

そう話し掛けてみたが、黒猫は顔を洗っているだけで、何も言
いはしなかった。

当たり前だけど。

でも、顔を洗って出直して来い、と言っているようにも見えた。

極東の島国であった旧国家が崩壊してすぐ、この国は出来上がった。
というより、旧国家が崩壊する原因はこの国にある――（いや、
根本な原因は計三回に及ぶ政権交代と、八回に渡る総理の辞職が原
因だが）。

当時、この土地を統治していた白雪月夜氏は総理にこう言った。

『もうあなたの方の茶番劇にはついて行けない。私はこの北の大地に
新たな国を作りたい。独立させてもらう』

呆氣にとられた総理に追い討ちを掛けるように、次々と地方を統
治していた人達が独立を宣言したのだ。

こうして、『黄金の国』や『侍の国』、『先進諸島国』などと呼
ばれた極東の島国は崩壊した。

そして、月夜氏はこの国を作り上げた。

白雪月夜氏はこの国を、いわば王政にした。全ての決定権は国主である月夜氏のものとなった。しかしそれは民主主義に染まった国民に多少の反感を買った。だが、月夜氏の政治はすぐに支持された。不景気から脱するため、食料自給率の引き上げを行なった政策のおかげだろう。

『職のための食による政策』

腹が減っては戦はできぬ??、単純そうに思えたこの政策は、意外にも景気を回復させた。

白雪家が農家や漁業関係者に資金を回す。そして、職に困っている人達を人材として派遣し就職させる。食料も増え、価格が下がる。職に就き収入が入り、食料品も安く手に入るようになり、再び物流が生まれ、不景気は回復したのだ。

しかし、今も謎のままだが、突然、月夜氏は失踪。それにより、月夜氏の一人娘だった白雪奈美が国主となったのだ。

白雪月夜は、なぜ消えなければならなかったのだろうか？
それは??。

「先輩？ どうしたんですか？」

「ん、……何でも無い」

と、今の国主たる白雪お嬢様が僕の顔を覗き込んでいた。白雪の子猫のような瞳にんだか僕は弱いので、適当に誤摩化した。

放課後、僕と白雪は歩いて街へと向かっていた。

今現在、彼女は白雪家の当主であり、この国の国主であるが、彼女の顔を見た事がある人は、ほとんどいないだろう。

あまり良い話ではないが、跡継ぎがまだいない白雪が殺されてしまうと国家崩壊に陥ってしまう。そのため、大臣達は白雪のお披露目はせずにいるのだ。

僕のような白雪本人から名前を聞いた人や、国の政治に関わっているか白雪家に仕えている者くらいしか、白雪の顔を知る者はいな

い。更言うなら、僕のように白雪が国主になってから知り合った人は、殆どいないだろう。

待ち行く人々の目は、あまり僕らを見ない。もしも顔を公表いたら、白雪にこんな自由はなかっただろう。間にボディーガードとかがいそうだ。自由も無いだろう。ポテチとか炭酸飲料を禁止にされそうだ。

そんな生活はしたくないな……。

「先輩、気分が優れないのでしたら、今日は止めましょうか？」

と、目敏く白雪は僕の浮かない表情を気にする。

「違うさ。ちよつと考え事と言うか、ポテチは美味しいというか」「はい？」と言って首を傾げる白雪。その仕草がいちいち子猫のようで可愛い。

動物に例えるのはなんだか気が引けるので、口には出さないけど。「で、白雪。どっか行きたい場所はあるのか？」

そうですね、と白雪は考え込む。本心から迷っているように見える。

何せこうやって外を歩ける事はあまりないのだから。週に一回あれば良い方、月に一度か二度が基本だ。いくら顔が公表されていないからと言っても、お嬢様は忙しく大変だ。

政治的何せ、一部の犯罪者の生殺与奪の権すらも持っているのだから。

「では、川原に散歩でも行きましょう。自然の恵みで先輩の気分も良くなるかもしれませんし」

うわあ、先輩に気を遣わせている僕、かつこ悪い。それもお嬢様。ざ、罪悪感が高まる。気遣いが重い。思いが重くて、想いに答えられない。

「別に僕に気を遣わなくて良いんだぞ？ 白雪の行きたいところに行けば良いんだ」

白雪はにっこり笑って言う。

「心配いりません。外の世界なら、どこに行っても楽しいですし、

先輩と一緒になら尚更です」

ぐはん。

やばい、一体僕が何をしたと言っただろう。生殺しと言うか、首だけで生かされている気分になれる。な、なんだか胸が苦しい。

絶対裏でなにか思っている後輩一人。奇麗すぎる笑顔が逆に怪しい。

白なのに黒く見える後輩。

僕の目が腐っているのならばいいけれど。いや、全然良くないけど。……えっと、じゃあ川原に行く前にちよつと寄って行きたい場所があるんだけど、いいか？」

「いいですよ？ 勿論、変な所でしたらどうなるか、お分かりですよね？」

やっぱり意地悪な後輩だった。一言余計だろ。僕と一緒にならどこに行っても楽しいんじゃないのかよ。

くそ、僕だって先輩だ。後輩に少しは良い場面を見せなければ。

「おじさん。いつもの二つください」

「はいよ。……二つ？ おいおい、彼女でも出来たのか？ ん？」

僕をからかいながら、さり気なく一つ分サービスしてくれるおじさん。PJ、プロフェッショナルの仕事だ。

場所は街中の小さなパン屋さん。『パンツくったことある？』と聞いたら、おうよ！ とはつきり答えたおじさんが店を構えている。その後殴られたけど。小さいながらも潰れない辺りを見ると、常連客が一定数いるようだ（という僕がその一人。べ、別に脅されて来てる訳じゃないんだからねっ！ と言うと怪しく聞こえるこのご時世）。

白雪は物珍しそうに店内を物色中。時折、『パンにこんなに種類があったとは……』などと呟いている。パン屋さんに来たことが無かったのだろうか？

ちなみに、見ていたパンは『アバターパン』。粒あんとバターの入ったパン。

……さすがにパン屋くらいには来た事あるか。確かにこんな種類もあるんだな、と思うし。

白雪の物珍しそうな視線に気付いたのか、おじさんが白雪に言う。
「好きなパン、一ついいぜ！」
「いいんですか!？」

白雪が驚いたような嬉しいような表情でおじさんの顔を見る。数秒おじさんの顔が固まり、けれどすぐにニツと笑って、おうよ!と親指をぐつと立てる。

気前が良いし、パンの味も良い。だが、一つこの店には問題がある。

気前が良すぎて潰れる寸前。売れ残ったパンを近所の子供達に無料で配るという奉仕活動を毎日のように行なうし、そのために夕方にパンを焼いたりする(それ目当てで来たのだが)ためだ。ジャムおじさんかよ、あんたは。

お大事に、という謎の言葉に、ありがとうございます、と返し僕はパン屋を後にした。何を大事にしろと言ったのか、薄々僕は気付いている。

川原に向かう道すがら、僕はちよつと気になったので聞いてみる事にした。

「白雪、パン屋には行ったこと無かったのか？」

「はい。……ですので、少々新鮮と言うか、嬉しかったと言うか……」

と言って、もらったパンの入った袋をぎゅつと抱きしめ笑ってみせる白雪。なんというか、意地悪とか言えなくなっちゃいそうな顔。ちなみに、白雪のもらったパンは『アンパン』だった。

……何も言うまい。

「ところで、先輩は一体何を買ったんですか？」

「ん？ ああ、これだよ」

と言って僕は袋を見せる。『ベーカリー Pan屋』と書かれた紙袋の中に袋が二つ。

『ベーカリー Pan屋』……、良い名前じゃないか。店の看板と袋に描かれているパンダのマスコットも可愛気があるし。……馬鹿にはしないよ。ただ、呆れているだけだ。

と、白雪は半ば強引に、力強く体全体を使って僕から紙袋を奪った。

「これは……、パンの耳ですか？」

袋の中を覗き込み、僕の目をまっすぐ見て白雪が聞く。何も悪い事はしていないとばかりに。……そうだ、何も悪い事はなかった。僕も白雪の体が??なんでもない。

「そ。安くて美味しいからさ」

パンの耳をバターたっぷりのフライパンで焼き、砂糖を絡めた一品。一袋三十円也。

そう言ってさりげなく袋を返してもらう。素直に返してくれたけど、白雪の鞆も一緒だった。お持ちすれば良いんですね、白雪お嬢様。

とか何とか話している間に、川が見えた。白雪が国主になってから随分と奇麗な川。子供の遊ぶ場所が減る今日、少しでも外で遊べる場所を、と街中を通る川を整備したのだ。

その川と向かい合うように土手に腰掛け、二人でパンを食べる。

その際、僕はそのまま腰掛け、白雪は下にハンカチを敷いていた。

「あっ、おいしいですね」

アンパンを食べて白雪は言う。食べた瞬間、一瞬顔が綻んだのを僕は見逃さなかった??つて、僕はストーカーかよ。

「そう? そりゃ良かった」

僕もパンの耳を食しながら答える。たまにはこういうのも良いだろう。

「あれ? 先輩、気分良さそうですね。もしかして……、ただお腹が減っていただけですか？」

案外そうかもな、と返事をしている僕の手からパンの耳を掠め取って食べる白雪。

いやいや、何のために二袋買ったと思ってるのかね。

「え？ それって私へのお土産のためじゃないんですか？」

そう言ってもう一つの袋を指差す白雪。信じて疑わない目だ。

「……………、そうだった。夜食かなんかにどうぞ」

「はい。ありがたく頂きます。お店のおじさんに感謝して食べますね？」

につこり笑って袋を受け取る白雪。

うん、合ってる。僕が買ったのは一袋だけだし。偉いな白雪。なんかこっちは寂しいけど。

「先輩って、人を見る目がありますよね。前に紹介してくれた定食屋の人も親切でしたし、今回もいろいろサービスしてもらいましたし」

「まあな。名字が人見だからかな。神道系の家系だし」

「人見だから人を見る目がある、ですか？ そうかもしれないね」

投げやりな返事は、白雪が実に下らないシャレを聞いた時にいつもすることだ。

……………時折思うことなんだが、もしかして白雪は僕のこと嫌いなんだろうか？ 僕は僕なりにある程度意味を込めて言っている事なんだけど。

結構な頻度で意地悪されているんだけど。

食べ終えたパンの袋を一つにまとめ、近くのゴミ箱へ捨てに行く白雪。本当なら僕がやるべき事のような気がするが、今となってはもう遅い。後悔後に立たず。あれ？ なんか違う。

しかし本当に、お嬢様って感じじゃないよな。我俣じゃないし、丁寧だし。

……………まあ、意地悪なこともあるけど。

でも、優しいし。

本当に、出来た奴だよ。出来すぎだよ。劣等感を抱きはしないけど。

「白雪はさ、今のお嬢様の生活と普通の一般庶民の生活、どちらが
いいと思う？」

川原の散歩をしながら、僕は何気なく聞いてみた。

白雪は少し考え、唇に左の人差し指を添え、

「普通の一般庶民の生活とは、一体どんなものですか？」

と質問に質問を返してきた。

むう、確かにそうだよな。比較するに当たっては、どちらもある
程度知って置かなければいけないか。単に僕に意地悪で言っている
わけではあるまい。

「えっと、学校に通って、家で家事をやったり買い物に出たり？？
といった感じかな」

僕の適当にして魅力も無い宣伝に、そうですか、と言って白雪は
考え込む。そして、

「やっぱり、普通の暮らしに憧れます」

と苦笑いを浮かべて答えた。

その返答は解かっていたが、やっぱり気に障った。『憧れ』……
ね。

まるで、叶わない夢のように言うじゃないか。

「今の生活に不満はありませんが、でも、私は思っています」

白雪は少し顔を俯ける。

「私が国主なんて、不釣り合いだと。私は国主になるような器じゃな
いと思うんです」

僕は答えこそ聞いていたが、しかし、別のことを考えていた。

だから、次に口から出た台詞は、どうにもおかしかった。

「お前は悪くないだろ、白雪。だから、そんな悲しそうな顔をする
なよ。お前は笑ってる顔が一番だから」

「えっ！？ あ、あの、せつ、先輩？」

途端、僕は何を言ってるんだよ、と恥ずかしくなった。思わず呆
然とする白雪から顔を背けてしまう。

うわあ、恥ずかしい。羞恥心で身が焦げてしまいそう。こんがり

ウェルダンに。

白雪も動揺しているのか、口が回っていない。

どうしよう、すごく気まずくなってしまうそうだ。無言のまま二人で歩くとか、罰ゲームも同然じゃないか。罰ゲームと言うよりは、恥ゲーム。……全然上手くない。

と、すごくタイミングよく白雪の携帯のアラームが鳴る。

すいません、と断りを入れて白雪は携帯を取り出す。

良かった、これで嫌な雰囲気は脱しそうだ。さっ、今のうちに何か話題でも考えておこう。などと変に上機嫌な僕。僕が策士だったら、なんらかのトリックでこのタイミングに電話を鳴らしただろう。どうやって？

電話を終えた白雪は少々残念そうに、もう時間みたいです、と言った。

これを普段の会話への糸口にしよう、と内心で思っている僕は非道だ。

「ごめんな白雪。僕の所為で予定狂っただろ？ 行きたい場所とかあったんじゃないのか？」

僕の自分の傷口を広げるだけの問いに白雪は慌てたようにいう。

「いえ、謝らないでください。先輩の気分が悪かったおかげで、楽しい思い出作れました。どうもありがとうございます。パン、おいしかったです」

「……そりゃどうも」

「いえ、先輩が誇る所は一つありませんよ」

「……そうですね」

……白雪、なんだか言葉の端々に悪意を感じるぞ。

その後、少しだけ急いで学校に戻り白雪と分かれた。学校に側近の人が迎えに来るのだ。

「では先輩、また明日」

「うん。また明日」

手を振って白雪は学校の中に。一緒にいる所を見られるとまずい

らしい。

まあ、僕としても少々それはまずいので、特に気にする事なく僕は家に向かった。

白雪奈美がただの少女だったならば、僕と白雪の関係はこうはならなかっただろう。

僕と白雪が出会うことも無く、出会ったとしても、こんな仲にはならなかっただろう。

だけど僕は思う。

これは奇跡でもなんでもなく、運命の悪戯だと。

第一章　く意地悪と悪戯　　2

第一章　く意地悪の悪戯　　2

暗く閉め切った部屋で、男一人と人影が会話する。

「お前の任務は、ただ彼らを狩れば良いだけだ。正確な人数は解らないが、しかし潜伏場所は解っている。ただお前は、そこで誰一人残さず、誰にも見られる事無く彼らを狩れば良い」

「……なぜですか？　彼らには、何か問題でもあるのですか？」

「理由が必要か？　お嬢様が望むことなのだよ？」

「……それは、本当にお嬢様の命令なんですか？」

「疑うのかい？　私の言葉を」

「……いえ、そういう訳では」

「君は『狗』だろう？　お嬢様の願いを叶えるのが、君の役割だろう？」

「……………」

「少しだけ教えてやろう。彼らはここ最近巷で騒がれている強盗だ。野放しにはできない、そうお嬢様が判断なさった」

「……そうですか」

「さっさと行かんと、明日の朝には戻ってこれぬぞ」

「……………」

消え去った『狗』と呼ばれた人影を、侮蔑するように男は言う。

「お嬢様のためと言うだけで動くとは、扱いやすい奴だ。中途半端な疑いは、何の意味も無い」

それは、雲が月を覆い隠し、深い闇が辺りを包み込む夜だった。辺りに明かりは見えず、暗くどこまでも続きそうな深い闇が広がっている。

事件は、路地裏で起こっていた。

「……あ……あ……」

少年は目を閉じていらなかった。

あまりの光景に、目を見開いていた。

今日まで一緒に生きてきた仲間達が、非常に無情に異常に、次々と彼の目の前で倒れて行く。

人影のようなモノが、仲間達を襲っていた。

ソレは全身が闇のように深い黒色の人影だった。探偵もののアニメに出て来るような、黒で塗装された犯人の影、と言った感じだ。その人影の動きに迷いは無く、ともすれば芸術に見えないでもない動きだった。

仲間のすぐ側まで影が現れ、仲間が倒れ、また仲間の元へ人影が寄って行く。なぜ仲間が倒れたのは、少年には解らない。

少年の仲間の一人が人影に殴り掛かる。

けれど、それは影を殴るような不可能な事だった。

仲間の拳は人影を突き抜け、体勢が崩れる。それを人影の腕が掴んだ。そして、触手のような黒い何かが、その腕から仲間の全身を覆うように伸び始めた。少年は動けなかった。

触手のような何かはまず仲間の口を覆い、続いて腕や足などを縛るように絡み付いていく。そして、体が完全に黒く覆われると、人影は仲間から手を離れた。途端、支えを失った体は重力に従ってバタリと倒れた。

ゆらり、と人影が揺れる。その人影は、この世界のモノで無いように、朧な影だ。

そして人影は、最後に残った少年の前に立った。

人影は言った。

「僕は悪魔だ」「俺は悪魔だ」

一つの人影から二つの声。どちらも、青年のような声だった。そして、一つ目の声が言う。

「お前達に恨みは無いが、我が主のため、殺させてもらう。??死

ね」

不意に告げられた死の宣告だったが、しかし少年は驚かなかった。

「あ……………」

そして。

すーっと、雲の切れ間から月光が差し込み、そして少年は気が付いた。

その人影の頬に伝う小さな一滴の光に。

悪魔は、泣いていた。

悪魔の足下から影が伸び、少年の体を包み込む。徐々にその体を蝕むように、影はその体を飲み込んで行く。

そして、少年の体は完全に闇に飲まれた。

少年は不思議と何も感じなかった。いや、何も感じる間もなかったのかもしれない。

少年は、死んだ。

路地裏を出て、誰もいない夜の街を歩きながら、人影は誰に語るわけでもなく、ただ呟いた。

「これで本当に良いのか？ ……白雪」

一つ目の声の呟きに答えるように、二つ目の声が答える。

「悪魔はあくまで、悪魔なんだよ。『良い』わけないだろ」

「……まったくだな。影の悪魔、シェイド」

「そうだろ？ 我が契約者、ミトモ」

そして二つ目の声は小さく笑いながら言った。

「俺はお前の望みを叶えよう。お前は俺に魂を売り渡したのだから人影は黒光りする懐中時計を取り出し、針が指す文字を見る。

長針が？、中針が？、短針が？を指している。

そして、『悪魔』は言う。

「……僕の魂が尽きるまでに、僕は白雪を幸せにしてみせよう」

第一章　く意地悪と悪戯　　3

第一章　く意地悪の悪戯　　3

その日は、特に天気が良い訳でもなかった。夜が明けようという時刻でもあった。そんな環境だったから、少年達はその誘いに乗ってしまったのかもしれない。

「……本当に、いいのか？」

少年達は、男に尋ねる。

男は仮面で顔を隠し、その姿もはつきりとしてはいない。だが、言動には重みがある。

「ああ、勿論だ。君たちは何も悪くない。悪いのは、全て私だ」

少年達は男を怪しむように顔を見合わせる。そして、男の顔を伺うようにして言った。

「……………だが、強盗だぞ？」

「心配するな。全ての責任は私が持とう。君たちの事は解っているつもりだ」

「……………本当、なんだな？」

男はふつと笑い、手を差し出す。

「勿論だ。信じる者を救おう。？？いや、信じぬ者も救おう」

少年達、巷を騒がせる強盗の犯人達は、男に手を差し出した。

そして男は少年達に札束を渡した。諭吉が百枚で束ねられていた。

それから数刻後、とある小さなビルで。

男の元に一人の女が現れた。女はスーツ姿で、無愛想に目を伏せている。だが少なからず、男に敬意をこめているのが伺えた。

そのビルの一室で、男は傷一つないガラスのデスクに肘をつきながら、その前に立つ女の話聞いていた。

「ご苦労様です。あなたはやはり、人を引きつける何かを持ってい

らっしゃる」

「そうか？ ……それはそれであまり嬉しくないな」

「……どういう事ですか？」

「何、君には解らないだろう。とにかく、強盗の件だが、ここまでは君との計画通りだ」

「はい。ですから、こうしてお礼に」

「いや、お礼などいらないよ。例えば君に頼まれずとも、私は自分でやっていた事だ」

「……そうなのですか？」

女が尋ねるのに頷き、男は言う。

「現状に満足できるのは、恐らく保って数年だろう。白雪お嬢様の年齢を考えれば、それは早すぎる限界だ。まあ、今のような状況ではしょうがない」

「……あなたは、白雪家が怖くはないのですか？」

「怖い？ 白雪家が？」

「はい。……少なくとも、私と同じ考えを持つ者があなたの他にもいました。しかし皆、白雪家の飼っている『悪魔』の話をすれば、無かったことにしてほしいと、そういつて逃げました」

「……なるほど」

「ですから、あなたは白雪家が怖くはないのですか？ また、その理由は？」

男は不敵に笑い、そして答えた。

「『悪魔』？ そんなもの、人間に比べれば可愛いモノだよ。人間の方がよっぽどおぞましい」

「……………」

「『悪魔』を畏れていては、国は良くならない。だから私が引導を渡そう。『悪魔』を殺し、白雪姫を追放し、この国の礎を築こう。犠牲は付き物だがな」

第一章　く意地悪と悪戯　　4

第一章　く意地悪の悪戯　　4

いつもの屋上。いつもの昼休み。

白雪は特に隠す素振りも見せず、唐突に話し始めた。

「最近巷で強盗事件が頻繁に起こっていましたよね？」

「ん？　ああ、そう言えばそうだな。それが？」

「実は、その犯人達の処罰を私に求めている人がいたんです。知つての通り、私の家は裏にも表にも影響力がありますから、私がそれを処罰しろと言えば、処罰されるでしょう」

「……で、白雪はどうしたんだ？」

「私はそれを許可しました。恐らく、私の家の手が回っている組織が、犯人達を処罰すると思います。これで強盗事件は収まりますよね？」

「……そうだな」

「私は、良い事できましたか？　良い国を作れていますか？」

「ちゃんと良い国になっているさ。強盗事件も止まるだろ？」

しかし白雪は顔を曇らせて言う。自分の言っていることを、自分では信じられないように。

「……私の決断は、悪くなかったんでしょうか？」

「大丈夫、白雪は悪くないさ」

悪いのは、あくまで僕だ。

だから、白雪はそんな泣きそうな顔をしないでほしい。白雪は笑っている顔が一番だから。

「よしよし」

なんとなく白雪の頭を撫でてみた。白雪の黒髪は、絹のような肌触りで心地よかった。

……ん？　なんか間違っている気がする。

「……………」

数秒ほど経ってから、我に返ったのか白雪が僕の手から逃れるように離れた。頬を紅潮させ、恨むように睨んでくる。

「……先輩、セクハラで訴えますよ？ 罰金と懲役、どちらがいいですか？ 今なら好きな方を選ばせてあげますよ？」

「無罪放免で」

冤罪でもないのに無罪を主張してみた。きっと誰も弁護してくれないだろう。

「……………解かりました。しょうがないですね」

小さく溜息をつき、本当にしょうがない人だ、という白雪。

判決は無罪。あれ？ なぜか恩を売られた気になってしまう。

「今回だけ、ですよ？」

そう言って、僕の方に頭をコテンと倒してくる白雪。

ほんのりと白雪の髪から優しい香りが風に流されて、僕の嗅覚を刺激する。白雪の短めの髪が僕に触れてくる。

「え？ あの、白雪さん？」

「先輩、今回だけですからね？ 今度似たような事をしたら、兵役に二年か懲役に五年、もしくは秘密のお仕置きの嫌な方を選ばせてあげますよ？」

秘密のお仕置きってすごく気になるけど、それより今回だけってどういう意味なのだろう。

誘っているのだろうか？ それとも、?????ののだろうか？

そんなはずないだろうに。何を考えているんだか、僕。

僕は言う。

「……本当に、白雪は意地悪だ」

「そうですか？ でも、先輩は意気地なしです」

「……………」

何も言えなかった。

けれど、これで本当に良かったのだろうか？

少年達は強盗で、それを裁く許可を白雪は出して、僕はそれを殺

した。

本当に、これで良かったのか？
白雪、僕にはそれがわからない。

第一章 く意地悪と悪戯 4（後書き）

とりあえず、これで第一章は終わりです。

Wordで作成しそれを移した形なので、多少変な部分があるかもしれませんが……。

当初は、『*』で区切って、一話にする予定でしたが、どうでしょう？

第二章　ゝ悪魔ゝ（前書き）

今回は、思い切って一話を長くしてみました

第二章　く悪魔く

第二章　く悪魔く

「白雪は、悪魔はいると思うか？」

「悪魔、ですか？　もしかして先輩、私の家に伝わる噂のことですか？」

白雪は少しだけ怪訝そうに小首を傾げながら尋ねる。

そんなところだな、と僕は答えておく。まあ、実際そうだし。

『白雪家に齒向かう者は、奴らが飼っている悪魔に殺される』という風説がある。

それが悪魔の仕業なのか、ただの偶然なのか、真偽の程は定かではないが、国を動かせる白雪家に反感を抱いてた者達が不慮の死を遂げているのは事実だ。

しかし白雪は言う。

「悪魔なんていませんよ。確かに家に反感を持った人が死んだりしましたが、でも未だに反感を抱く人がいる以上、悪魔もいないと思います。本当にいるのでしたら、そう言う人たちもあその悪魔にやられて存在しないでしょう？」

それに、と白雪は付け加えて言う。

「『奴ら飼っている悪魔』と言いますけど、私はそんなもの見たことありませんから。見たくありませんし。そして何より、悪魔は飼うのではなく、契約するものだと思います」

「……それはそうだな」

生返事をしながら、僕は思う。

白雪は知らなくて言い話だ。例えば、その『悪魔』がただの隠喩だと言うことだとか。『悪魔』が悪魔と呼ばれるに値する、悪魔らしい働きをしていることだとか。

白雪は知らなくていい。

知られては、とっても困る話だ。

「でも、本当はいるのかもしれないね……」

しかし、白雪はどこか遠くを見るようにしてこう言った。

「だから、私は不幸なのかもしれません。……『悪魔』を飼っているから」

「……白雪？」

白雪の表情は翳るばかりだ。

「お父さんは、どうして突然いなくなってしまったんでしょうか？」

私にも何も言わず、それこそ消えるように」

そして、白雪は言った。

「まるで、悪魔に消されたみたい」

白雪の顔は悲しみに染まっていた。そして、微かなどうしようもない思いが滲んでいる。

「……白雪は、お父さんのこと、好きだったのか？」

僕の質問に白雪は、どうでしょう、と小さく笑った。

「私が小さい頃にお母さんは病気で死にましたから、本当の家族と呼べたのも、お父さんだけです。だから、……やっぱり好きだったのかもしれません」

それなら、きっと。

唯一の家族を失った時、それも何の前触れも無く消えてしまったその時、白雪はどう思ったのだろう。僕にはわからない。

「……白雪。まだ死んだと決まった訳じゃないし、探したりしないのか？」

白雪は凜として答えた。

「はい。探しません」

「え？ どうしてだ？」

それは、少々予想外の答えだった。てっきり、今も血眼になって

探しています、とか言うと思ったのだけだ。

そんな僕の思考を読み取ったように、白雪は言った。

「突然消えたのは、きつと、お父さんの望んだ結末だと思うからです。きつと、何か思う事があったんだと思います。私に何も言わなかったのも、きつと何か意味があるんだと思います。だから、探しません」

「……そっか」

それは、寂しくないのか？ と訊こうかと思ったが、先輩がいるから寂しくありません、とか言われそうな気がするので止めておいた。自意識過剰な気もするけど。

「……白雪は強いな」

けれど、白雪は俯き小さく呟いた。

「私は……強くなんか……ありませんよ」

それは、僕に取っては、深い意味のある言葉だった。

*

その日は、雲の無い夜だった。夜が明けようという時刻だった。そんな環境だったから、科学者達はその誘いに乗ってしまったのかもしれない。

「……お前。一体何が目的なんだ？」

科学者達は、仮面の男に尋ねる。

夜の闇に紛れるような、真つ黒の仮面で口元から上を隠す男。うつすらと笑みを浮かべているように見えた。

「目的？ そんなもの、未来の生活の向上、科学技術の躍進以外に何がある？」

科学者達は訝しみ、顔を見合わせる。そして、仮面の男に尋ねる。

「……だが、悪魔の技術だぞ？」

仮面の男は小さく笑い、断言する。

「心配するな。全ての責任は、私が持とう。あなた達の考えは解つ

ているつもりだ」

「……………本当、だろうな？」

男はふつと笑い、手を差し出す。

「勿論だ。信じる者を救おう。??いや、信じぬ者も救おう」

科学者達は男に手を差し出した。

そして男は、科学者達に島を与えた。

その数刻後、とある小さなビル。

男の元に、一人のスーツ姿の女が現れた。女は目を伏せ、男の顔を見ずに尋ねる。

「……………計画は順調、と言ったところですか？」

男は手で一丁の銃を弄びながら言う。

「ああ。彼らの協力なくしては、新しい国家は作れない。……少々、別のところを感じかれたかもしれないが、恐らく核心は突かれていないだろう。君に危害が及ぶ事は無いはずだ」

それは銀で作られた銃弾が込められた銃。

「……………そうですか」

女は相変わらず目を伏せているが、男は何か気付いたようだ。銃をデスクの上に置き、表情の解らない仮面の顔を傾ける。

「心配か？」

「いえ。私はあなたを信頼していますから」

女はすぐに素っ気なく答える。その答えに、一切の迷いはない。

男は満足そうに頷く。

「だろうな。現状では、自らの信愛する主を裏切るような状態だからな。信頼を寄せられないような男にはついて来ないだろう」

「ですから、この計画は悟られてはならないのです」

男は、そうかと頷き、そして女に言った。

「あとは奴の動き次第だ。『悪魔』を殺す方法は、既に我が手の内にある。それで全ては終わり、始まるだろう」

再び男は銃を取り、それを掲げる。

「シルバーブレッド、なんて洒落込むつもりはないがな……」
「？」

女は首を傾げ、そして男に訊いた。

「シルバーブレッド……ではないのですか？ ブレッドでは、パンですよ」

*

とある屋敷の一部屋で、男と人影は話していた。

「今回の任務、我らがお客様の命だ。受けてくれるな？」

「……お客様が望まれることなら」

「よろしい。お客様のために、その力を振るえ」

「はい」

「今回は、島一つを消してほしい」

「……島一つという事は、島に住む住人を全て、という事ですか？」

「正確には住人ではない。元々は無人島なんだよ。そこに今、テロリストが潜伏している。彼らを狩って欲しいのだ」

「……それで？」

「今回は、島の物を一切傷つける事無くやってほしい。君ならば簡単だろう？」

「……島のモノ、機械や施設を傷つけずに、と？」

「………、そういうことだ。明日の夜、飛行場に来てくれ。島まで送ろう」

「……わかりました」

影が消え、男は言う。

「ちっ、これだから冴えてる奴は。ただ言われたことだけ忠実にやるから良いものを」

そして男は笑みを浮かべて言った。

「それも、今回までだ」

そして、その男の呟きをその人影は聞いていた。

《国舞島》と呼ばれる島だった。

数年前まで無人島であったため、今でも島の大半は豊かな自然に囲まれている。島に平地は殆ど無く、標高三百メートル程の山を中心としている。

そんな島の中で唯一の人工物である建物に、男達はいた。

四方が森に面した二階建ての建物で、何かの施設のように見える。

場所は島、もとい山の中腹よりやや高めにある。男達は何かが来るのが解かっているかのように、銃器で武装し見張りをしていた。

それを高度五百メートルの位置から眺め、人影は呟いた。

「あれが今回の目標か……」

小さな飛行機が、その島の上空を飛んでいた。黒の機体には何も描かれておらず、それが『悪魔』とも呼ばれる組織の所有する機体だとは世間には知られていない。

そして、その機体の操縦士は人影の問いに答える。

「はい。《国舞島》と呼ばれる、現在、公式記録上では無人島となっている島です」

そして操縦士は、決り文句のようにそれを言った。

「我らがお客様のため、その願いを叶え、この国に永遠たる幸福を」
そして、飛行機のハッチが開き??、

飛行機は爆発した。

正確に言うなら、撃墜された。

島の中央部、施設のような建物から、眩い光の筋が放たれ、その光は飛行機を直撃し、翼を貫通し融解、爆発させた。

島の施設内ではこんな会話がされていた。

「レーザー砲、着弾確認。レーダーには何も映りません。撃墜しました」

「やったか!？」

色めき立つ同士を前に、リーダー格の男はこう言った。

「……いや。そんな簡単には行かないだろう。……奴らが、来た」

また、『悪魔』と呼ばれる組織の本部では、こんな会話がされていた。

「機体の撃墜確認。操縦士、狗の生存確認はとれません」

「……そうか。やはり、こうなったか。まあ、そこまで行ければ上出来だ」

「どうしますか？」

通信役の男は、いつも狗に命令を出す男に尋ねた。

「……、予定通り明朝に島に着くように船を出しておけ」

「はい」

「……これくらいで奴が死ぬのなら、我々も苦勞しない」

そして、島の上空ではこんな会話がされていた。

「……レーザー砲、か。始めて見た」

「おいおい、こいつ折角助けたのに気絶してるぜ？ まあ、レーザー砲が直撃したら、普通ならこうなるか……。死のイメージってやつ？」

「しかし、テロリスト、ねえ。どこかの秘密結社か？ オーバーテクノロジーもいい所だよ」

「それはお前だろ？ 悪魔のような力を持った、『悪魔』と呼ばれる組織の人間。おつ、森の中にも何人かいるみたいだな。随分とまた、嚴重に守ってますこと。それほど大事なものがあるんだろ？ 人影は二つ、声は二つあった。どちらも大人とは思えない声だった。

二つの人影は共に重力に従って落下している。しかし、どうにも一人は気絶しているようで、その人影はピクリとも動いていなかった。その一人はスーツ姿で、操縦士だった。

もう一人は、全身を包み込むような漆黒のマントを着ているように見える、青年を黒で染めたような、人影だった。人影は操縦士を

右手で掴み、左手の腕時計で時刻を確認。長針は午前零時を回ったところだった。

「時間はたっぷりある。シェイド、お前の力は僕の力だろ？」

「そうだな。契約者のお前に俺は力を与えた。……ただ、それだけだ」

人影と操縦士は重力に従って落下していく。そして、地面に激突する寸前でそれは止まった。

人影から、翼が生え、羽ばたいていた。

それは？？悪魔の翼だった。

先ほどまではためていたマントが、翼に変わっていた。闇のような黒さを持つ翼で羽ばたきながら地面に静かに着地し、人影は咳く。

「白雪姫の幸せを『悪魔』は願おう」

*

「あなたは神を信じますか？」

実に馬鹿げた質問だと、僕は思った。

ソイツは僕に向かって、確かにそう言ったのだ。

僕は答える。

「信じなければ救ってくれないような神様を、僕は信じてはいないな。信じているのは、僕が幸せを願った人が幸せになれる、ということだけだ」

ソイツは言った。僕が心のなかで思った事まで、見透かしたように。

「……実に、最高の答えじゃないか。自分を犠牲にしてまで幸せにしたい、なんて」

「……………」

じゃあ、とソイツは僕に手を差し出す。

「これは悪魔の契約だ。俺はお前に力を与えよう。??お前が望んだ物を俺は与えよう」

僕は迷う事無く、その手を取った。

ソイツ、黒猫の手は柔らかかったが、しかし頼りになる手だった。黒猫と手が結ばれた瞬間、辺りが暗闇包まれる。闇に飲まれるように、僕の視界は消失した。

「俺は影の悪魔、名前はシェイド」

どれくらい時間が経ったのか解らない。目の前が真っ暗だが、不思議と自分の体は見える。そして、ソイツは現れた。黒猫ではなく、人型だった。

少年のような背丈で、悪戯小僧のような印象を与えられる顔立ちだった。

悪魔、シェイドは言う。

「俺は影、実体は存在しない。好きな形に体を変える事が出来る。黒猫だろうが人だろうが、あるいは物、例えばマントとか」

シェイドの格好が黒猫、人と変わり、マントとなって僕を包み込んだ。それは二次元の存在のように薄いが、確かにマントだった。再び人型に戻り、シェイドは言う。

「これは悪魔の契約。俺はお前に力を与える。お前は俺に魂を売り渡す」

青白く光り輝くいかにも人魂のような物を右手に出し、地獄を思わせるような煉獄の炎を左手に出す。

「お前の魂、解かりやすく言うならば、寿命量に応じて俺はお前に望むものを与える」

人魂と炎を消し、シェイドは僕に指を指して言う。

「お前の魂が尽きたとき、それがお前の死ぬ時だ。よく考えろ」

悪魔は僕に光り輝く何かを投げてよこす。

「それは契約の証、そして魂の残量を記す物だ」

それは黒の懐中時計だった。ハンターケース型という、二枚貝の

ように蓋が取り付けられているタイプだ。表面には『A9』の刻印。

『A9』 『悪魔』ということだろうか。もしくは、『永久の間』かもしれない。

どちらにしろ、悪趣味な装飾だ。悪魔だけに。

「忘れるなよ、相棒？ これは悪魔の契約だ。悪魔が、なぜ悪魔と呼ばれるのか、それを知らなければこの契約に意味は無い」

音声がフェイドアウトして行く。……これが噂の精神世界というものだったのか？

気がつけば、いつもの屋上だった。

一見何も変わっていないように見える僕の体。実際、一点を除いて何も変わっていない。

僕の右手に握られた懐中時計が、日光で黒光りする。

全ては動き出す。

僕は懐中時計を開け、中を見る。

数字は零から九まであり、針は全部で三本。だが時刻を表す時計ではない。今現在、『百』と書かれた三本の中で一番長い針が九を、中くらいの『十』と書かれた針も九を、一番短い『一』と書かれた針もまた九を指していた。

九百九十九、それが僕に残された魂の残量。

僕は悪魔の言葉を思い出す。

『悪魔が、なぜ悪魔と呼ばれるのか、それを知らなければこの契約に意味は無い』

僕は言う。

「馬鹿だな。いや、優しいのか？ お前がそんな事を言ってしまうば、答え同然じゃないか」

？？優しい？ はき違えるなよ？ 俺は魂をもらい、お前は望む物を得る。ギブアンドテイク、俺達はそういう関係だ。

悪魔の声が脳裏に響く。なるほど。いつでも呼び出せる、という

訳か。

良く自分の影を見ると、形が変わっている。僕自身の影から、猫の形の影がでている。だが、そこに猫はいない。かと思えば、影のない猫が現れる。

「なあ、悪魔。僕はお前をこき使うぞ？」

猫は言う。

「いいぜ。ただし、俺は悪魔だ。思い通りに動かせると思うなよ？
??これが『悪魔』の理論だろ？」

『これは悪魔の契約だ。俺はお前に力を与えよう。??お前が望んだ物を俺は与えよう』

悪魔、お前は実に良い奴だ。いや、悪い奴というべきか？

お前は僕に力を与えてくれた。ただし、それは契約のおまけだ。力を与えるのが契約ではなく、僕に望んだ物を与えるのが契約なのだ。

悪魔の力を使う分には、魂は消費されない。

『悪魔が、なぜ悪魔と呼ばれるのか、それを知らなければこの契約に意味は無い』

その答えはやはり、何かに対して悪であるから、悪魔なのだろう。何に対して悪なのか、そしてこの契約の意味は??。

悪魔に対して、悪い契約だろう。

＊

銃声が島に木霊していた。

「嘘だろ!？」

サブマシンガンを撃ち終え、男はそう言うしかなかった。

確かに、銃弾はその人影を捕えて、貫通していた。だが、その人影は、何事も無かったようにそこに佇んでいた。人影は、あくまで

影であるかのように。

そして、サブマシンガンの弾が切れたと悟った人影は腕を伸ばし、佐々木をその闇に飲み込んだ。

施設内では、こんな会話がされていた。

「駄目です！ 佐々木、草野、白鳥がやられました！」

「情報を集めろ！ 何かトリックがあるはずだ！」

「奴に銃は効かないみたいです！ そして、奴に触れた場合、助かる見込みは無いと……」

絶望に染まりつつある仲間達を見て、リーダー格の男は言った。

「ポイントGに誘い込め。それで倒せなかった場合は、我々も腹を括ろっ」

「しかし、まだアレがあります！ いくら何でも、アレで死なないはずは??」

しかしリーダー格の男は最期まで言わず、こう言った。

「それでは駄目なんだよ。それでは、あの男と同じではないか。…
…我々の目的を忘れるな」

爆発音が島を埋め尽くさんばかりに鳴り響いていた。

その爆発音に追われるように、人影は島を移動していた。

人影を追うように爆発音を響かせていたのは、地雷だった。大量に埋められた地雷が近くの地雷を誘爆させ、人影を感知しても爆発を起こし、断続的に爆発音が鳴り響く。

常人ならばその爆発の中無傷で移動できはしなかっただろう。爆発によって飛来した木々や石片で傷ついていただろう。だが、その人影はその全てを受けて尚、傷ついていなかった。

受けて、それを貫通させていた。

ホログラムのように、実体など無いように。

それでも、そんな人影も、地雷の爆発を直接受けるのはまずいかもしらなかった。

地雷に追われるように移動していた人影が、安全を求めて逃げられる場所は一箇所しかなかった。いや、これだけ爆発がおきながら安全な場所があったという方が奇跡的だろう。

そこは、背後に岩壁がそびえ立っている、自然の袋小路だった。そして、そこは坂の底辺に位置していた。

背後の岩壁に遮られるように、もう逃げ場は無い。

轟、と爆発音が人影の四方八方から聞こえた。

そして、坂を形成していた土砂と岩壁が雪崩落ちて来た。

「土砂崩れか！」

人影は呻き声を上げた。地雷は無意味に爆発したのではなく、相手をこの場所に誘い込み、そして土砂崩れに巻き込むためだった。相手が機械や人間だったのならば、この作戦も効いただろう。

だが、相手は機械でもなければ人間でもなかった。

『悪魔』だった。

もはやかつての島の原型は崩れていた。その場所は、岩壁が崩れ土砂と混じり合っている。

そして、そこを三人の男が銃器を片手に何かを探すように移動していた。

「いたか？」

「いや、見当たらないぜ。主任、やっぱりアンタの言った通りだったのかな」

「そうかもな……」

そう言つて、三人はリーダー格の男が言った言葉を思い返した。

『奴が銃弾を貫通させるのはもはや事実と受け止めよう。だが、奴はその際必ず止まっている。つまり、移動と全てを貫通させる事は同時には行なえないのではないか？』

一人が言った。

「さすがだな。俺達には考えつかねえよ、そんな事。銃撃が効かない時点で俺は諦めるぜ」

もう一人も言う。

「ああ、だからあの人に俺達について行こうって決めたんだ。あの人の言うことは正しい」

そして、一人が言った。

「……なるほど。『影還し』??この能力にもそんな弱点があったのか」

最後の一人は、『悪魔』だった。

「だが、僕的能力はそれだけじゃない」

そして、二人は反応し振り向き様に銃の引き金を引いていた。

それは人影を貫通??せず、当たりもしなかった。

二人が引き金を引いた瞬間には、人影は二人の目の前まで来ていた。それは、おおよそ人間の動きでは無かった。

「『魔憑き』??悪魔の動きにはついて来れないだろ?」

人影の動き全ては、黒い粒子を残留させる。

人影の腕が振るわれたとき、既に二人の体をその腕は貫通し、腕の後を追うように伸びた黒い粒子の軌跡が二人の首を繋いでいた。

その動きは、悪魔の動きだった。

「もはや、ここまでか……」

施設の最下層で、リーダー格の男はモニターを見て唸るように呟いた。

施設の防犯装置、レーザー光線をマントが無効化し、釣り天井が作動した瞬間にはもう釣り天井の下にはいない。

「そもそも、上空五百メートル付近でレーザー砲を喰らっても無事でいたのだ。ある意味当然の結果とも言える、か」

男の前には、人影がいた。

人影は、漆黒のマントで身を包み、照明の下だというのに顔は影の

ように黒く見えない。

「この……悪魔が」

人間でない者を相手に、勝てるはずはないと言わんばかりに男はそう吐き捨てた。

そして、その手刀が彼の首を突き抜けた。

「……僕は?? 狗だ。だから、これでいいんだ」

人影は頭に手を添え、唇を噛み締めて言う。

「白雪は正しいんだ。?? 間違っているの、僕だ」

人影は、その頬を伝う涙を拭った。

*

いつもの屋上、いつもの昼休み。

「知ってますか先輩？ 原子や分子レベルから食材を作る技術があるんですよ？」

「へえ、初耳だな。すごい技術じゃないか」

「ただ、その技術を開発した科学者のいる研究所が、テロリストに占拠されてしまったんですよ。このままだったらその技術が悪用される、という話があったんです」

「……それで？」

「テロリストの鎮圧を私は許可しました。最悪、科学者やその技術が失われてもいいとも言いました。原子や分子レベルでの物質の構成ということは、逆に分子や原子レベルにまで簡単に分解する技術もあるという事です。それが悪用されると言う事は、凶悪事件が増えてしまいます。だから私は未来の生活の向上より、現在の国民の安全を優先してそう決断しました」

「……そっか」

「私は、酷い女ですよ。……人の命を数で数えるんですから」

どこか憂いを含んだ顔を見せる白雪に、僕は即答する。

「そんなことはないよ」

「……そうですか？」

白雪は笑ったが、その笑顔に覇気はない。
だから、僕は、そういう顔を見たくないんだ。

「白雪は優しいさ」

「え？」

「白雪は優しい。誰かが死ねば悲しめるし、傷つく痛みを知っているからな」

そう、白雪は優しすぎる。触れてはいけないような優しさ。残酷なくらいに優しい。

白雪はふっと僕から顔を背ける。肩を震わせている。

やばい、あまり慰めにならなかったかな。

白雪は僕の顔を見ず俯き、肩を震わせながらぼつりと呟いた。

「先輩は、優しいですね」

僕は俯きながら言う。

「………そんなことは、ない」

優しくなんか無い。僕は、優しくなんか無い。例え優しくかったとしても、それは優しい顔の仮面を被った、悪魔のような偽善者だろう。

「………僕が誰かに優しいのは、誰かに優しくないからだよ」

「はい？」

僕の呟きは白雪には聞こえず、白雪が不思議そうに僕の顔を見る。

「先輩、なんて言っただんですか？」

「………教えない」

「教えてくださいよ！」

そう言っ、俯いていた僕の顔を下から覗き込む白雪。子猫のような無邪気な瞳。そして、

「なんて言っただんですか？ せんぱーい、教えてください」
ぐはっ。

なんだろう、台詞自体に大した脅威は感じないのに、このシチュ

エーションはやばい。というか、台詞が台詞なだけにしつこく聞かれると困る。

「せんぱい？」

小首を傾げ、僕の目を覗き込む白雪。小動物のような印象。

やばいやばいやばい！ 本当に何かが崩壊屈折支離滅裂してしまいうような、世界がどうにかなってしまいうような、僕の心が折れてお終いそうな！ めでたしめでたしみたいないな！

どうして僕は、『下から目線おねだりボイス』にこんなにも弱いんだ。こうなっては何も反抗できない。自分の無力を呪いたくなる。いや、既に呪われているか。

「あ、えつと、その……」

もう何も言わない訳にはいかない。しかしどうしよう、まさかもう一度アレを言うわけにもいかないし。働け、僕の頭脳。

その間にも、白雪の視線が僕の目に突き刺さる。ど、どうしてこうなった。普通、あんな台詞は何事も無かったように聞き流すだろ。そして、悪魔のような閃きが苦し紛れに浮かび上がり、僕はそれを言った。

「？？白雪は可愛い、って言ったんだよ」

「はいっ！？」

白雪が顔を赤くして、目をパチクリする。ついでに口もパクパクさせる。

……………。

本当に可愛い。

「えっ、あのっ、それって、え？」

この機会を逃してなるものか。僕は時計を見て、

「じゃ、そろそろ僕は教室に戻るよ」

と言って白雪に背を向けて手を振り、屋上から颯爽と出て行く。それは逃走だった。自由への逃亡、言い逃げだ。弁解すると……、恥ずかしかったから。

……………、僕は意気地なしです。

そんな僕でも、やらなければならないことがあるが。

「白雪。……これじゃ駄目なんだよ」

*

コンコン、とドアをノックする音が鳴る。

国を動かすお嬢様の住むお屋敷。そのお嬢様のいる部屋のドアを、大臣は静かにノックした。

「はい。どなたですか？」

大臣は名を述べ、用件をドア越しに言った。

「お嬢様、少々問題が発生しました。組織に??裏切り者がいました」

そして大臣は、その裏切り者の写真をドアの隙間から入れた。

それを見て、お嬢様、白雪奈美は息を飲み、静かに言った。

「……詳しく、お願いします」

ぶるる、と備え付けの電話が鳴る。

仮面の男は静かに電話を取る。彼がいるのは、いつものビルだった。

「もしもし」

『私です』

男はいつもの女の声に、少し口調を和らげて言う。

「君か。……どうした？ 例の計画に、何か問題でも？」

『そうではありません。……明日、計画を実行できそうです』

男は口元を歪めたが、醸し出す雰囲気が一瞬だけ変化を見せた。

それは、どこか悲しげで、自嘲的なものだった。

「……そうか。それなら私もすぐ動こう。予定通り動かしてくれれば、『悪魔』狩りは成功するだろう。『悪魔』といっても、人間だからな」

『……あなたはなぜそれを知っているのですか？』

「疑うのか？ まあ、仕方がないか。……しかし、これは確かな情報だ」

『……勿論、これまであなたの事を信用してきたのですから、今更疑うような事はしません』

「そうか。それなら、明日は指示通り動いてくれ。それで全ては終わる」

『……本当にお嬢様は、それで……』

「間違いないだろう。いや、これは君のアイディアだろう？ 私も今更君のことを疑おうとは思わないよ」

『そうですか。……しかし、本当に『悪魔』を殺せるのですか？

奴は影のように何も受け付けず、消えるように移動し、忍者のように分身し、触れただけで殺します。……本当に悪魔のような人間なのですよ？』

「心配か？ だが、私はやらねばならないのだ。今のままでは、駄目なのだよ」

仮面の男は言う。

「私はもう戻れない場所まで来ている。だが、君はまだ戻れる場所いる。だからあえて問おう。」

「？？君が望むものは何だ？」

『……あなたは、何者なんですか？』

女は男の問いには答えず、逆に問うた。男は静かに答えた。

「悪魔だよ。誰よりも悪い、最低最悪の人間だ」

しかし、女はそれを無視してこう言った。

「……白雪、月夜様ではないのですか？」

「……………」

しばし沈黙し、一度息を吐いてから男は答える。

「奴は死んだよ。奴はこの国の闇、『悪魔』に殺された。……これは、ある意味奴の遺志を継いだ戦いかもしれないな」

女は再度尋ねた。

「……あなたは、誰なんですか？」

それに男は答える。

「私の名は、信玖人義」

男、信玖人義は言った。

「私は『悪魔』を殺そう。『悪魔』にいかなる理由があろうとも、

私はその存在を許さない」

第二章　く悪魔く（後書き）

どうでしたでしょうか？

戦闘シーンの表現がうまくできない、と作者は思っておりますが…。
…。

第三章　　～終わりから始まり～

第三章　　～終わりから始まり～

「白雪は、騙す側と騙される側、どちらが悪いと思う？」

「それは、騙す側ですね。騙す側がいなければ、騙される側はいませんから。でも、騙される側も悪い場合もありますけどね。例えば、『あなたを幸せにするので百万円ください』といった感じです。何でも信用しては駄目です」

「そっか。じゃあ、いじめる側といじめられる側だったら？」

「それも当然、いじめる側ですよ。どんな理由があっても、いじめはいけません。いじめた人の将来と自分の将来を駄目にしてしまいますから。苛ついたら、その人の苛つく所を治してあげようとするべきです」

「でも、間違っているのと解っていても、止められないことだってあるだろ？　白雪はどう思う？」

「そうですね。でも、それはその人が弱いだけだと思います。そういう人は、誰かに止めてもらうしかないんでしょうけど」

「……………白雪は強いな。それに、優しい」

「そうでもないですよ？」

「え？」

「仮に、殺した方と殺された方では、どちらが悪いのか考えると、私は答えられませんから」

「……………」

「普通に考えると、殺した方が悪いような気もしますが、けれど、相手に殺意を抱かせるような人間だから殺されたと考えれば、私は???。勿論、殺人鬼のような目的も無く殺す人は別の話ですが……………」

「……………やっぱり、白雪は優しいよ」

「え？」

「白雪は、人を殺した人間を許容できる奴だ。生きている人間を大切に思う。……それはやっぱり、優しいんだと僕は思う」

僕はその優しさが？？眩しい、怖い、痛い、辛い、苦しい。

その優しさは、『悪魔』の僕には体を貫かれそうなくらい刺々しい。

優しさが、優しくない。

「……先輩。先輩は、私に何か隠してませんか？」

と、白雪は僕の顔を覗く。むう、表情に出てしまったか？

いつものような純粋な子猫のような瞳ではなく、どことなく濁った瞳だ。

隠していることは、知られたくない事だ。

「白雪？ 何を言ってるんだ？ そりゃ僕だって、人に隠したいことの一つや二つあるけど」

大げさに肩をすくめてみせる僕。

けれど白雪は僕の巫山戯た態度など気にせず、僕の目を見て言う。

「そうじゃありません。……先輩は、何か私に関する隠し事をしていますか？ 困っていることがあるなら、私に相談してください」

だから、その優しさは??。

僕が触れていい物じゃないんだよ。

「……何も。何も相談する事は無いよ。……僕の問題は、僕自身で解決する」

僕は屋上を離れる。白雪は何も言わず、ただ僕の背中を見ていた。背後に聞こえる屋上の扉の閉まる音が、なんだか不吉な音に聞こえた。

と、屋上を離れてから僕は気がついた。

「……そっか。今までの白雪も、……こんな気持ちだったのかな」
無理矢理何かを隠そうとするこの感じ、……あまり良いものじゃない。

だけど、過ぎ去ったことは過ぎ去った事。

変えられない過去を悔やむより、僕は未来を変えるための努力をしよう。

誰もいないことを確認して、僕は悪魔に語りかけた。

「……今日は忙しくなる。いままでありがとう、シェイド」

悪魔の声が脳裏に響く。

「??こちらこそだぜ、ミトモ。今まで楽しかったよ。そして、これからも宜しくな。」

僕は頭を掻く。なんだよ、この親友みたいな返事。

「お前は悪魔なんだろう? それなら、もっと悪魔らしくしろよ」

悪魔は笑って答えた。

「??お前だって『悪魔』だろ。」

その通りだった。

*

夜の帳が降りた。雲は月を隠す。国の主が住む屋敷だ。

全てが、始まり、終わりを告げる。

「今回の任務は、裏切り者の始末だ」

男は、狗と呼ばれる人影にそう切り出した。

「……裏切り者?」

「そうだ。組織の中に裏切り者がいた。……その者の行ないにお嬢様はご立腹だ。そして、肅正の許可を降ろされた」

「……………」

「お嬢様のため、やってくれるな?」

「……………」

人影は黙り、返事は無い。

「お嬢様のためだ」

再度男は繰り返した。懐に手をやり、何かを握った。

「死ね!」

銃声が部屋を駆け巡った。

男は自分の銃口から出る煙と、その延長線上にできた銃痕を見る。つくづく勘のいい奴だ。いや、元々聡明な奴なのだろう。だが馬鹿でもある。だからこそ、我々に取っては、もはや脅威なのだよ。手のつけられない狗は必要ない」

人影は部屋から消えていた。男は無線でそのことを部下に知らせ、警戒態勢を敷く。

「奴を発見次第、例のポイントへ誘い込め。奴は自分の能力を過信している」

無線を切り、男は呟くように言った。

「奴は狗ではなく、猫だ。自由気儘な黒猫だ」

『悪魔』狩りが始まった。

屋敷の至るところで鳴り響く銃声。

それを白雪のいる部屋のドア越しに聞き、白雪の側近、咲は白雪に説明をする。

「……今、例の裏切りの者が屋敷内に侵入しております。着実に追いつめておりますが、念のために、どうぞこれを」

白雪にソレを渡す。

「……………」

白雪はソレを無言で受け取り、握りしめる。

それは、信玖人義の持っていた銃。シルバークレートの入った、一丁の銃。

そして、白雪は咲の顔を見て言う。

「咲、私は……………」

咲は主の言葉を聞き、そして言った。

「……………お嬢様が望むものでしたら。……………私は何も言いません」

白雪は小さく笑い、頭を下げる。

「咲、……………ありがとう」

「いえ。……………では、気付かれる前に」

そして、白雪と咲は部屋を出て行った。

銃撃に追われるように人影は移動していた。着実に人影はある場所へと誘われていた。

そして、遂に人影は追いつめられた。眩い光が、人影を照らした。背後に屋敷を囲む塀、人影を囲むように三十人の黒服。それは人影と同じ組織の人間だ。

『悪魔』と呼ばれる組織の、悪魔じゃない人間。

その中から一人の男が出てくる。

それは、人影に命令を出していた男だった。

「ここまでだな、狗」

狗と呼ばれた人影は、眩いばかりの光に当てられながら、その姿を明確に認識させない。

全身が黒に染められた人の輪郭、そうとしか認識できなかった。

組織の人間もその姿を見るのは、初めてだった。

いつだって、狗と出会うのは暗闇の中だったから。

だから、狗がそんな姿をしていることに多少は驚いた。

驚き、納得した。

奴は、本物の悪魔なのだと。人間ではないのだと。

「貴様の裏切り行為、我々は見過ごす訳にはいかない。だからここで大人しく??」

男は銃を狗に向ける。狗は、微動だにしない。

「死ね」

銃声になり、狗は消し飛んだ。

そして、

「……どういう事だ？ なぜ、奴はいない……」

ざわめきが生まれた。

狗は、銃弾を受け塵のように消えた。まるでそれは本体でないように。

影分身のように。

だが、男は慌ててはいなかった。男はすでに、この後に起こる事を知っていた。

＊

「問題ない。ここまでは順調だ。奴がここから逃げるための道は一つしか無い。そして、絶対に抜けられない道だ」

信玖人義は笑みを浮かべる。いつものビルに彼はいた。

そのガラス張りのデスク上には、『悪魔』達が使っていた無線。彼の右手には、小さな小型の通信機。

「奴が人間かどうかなどどうでも良い。もしかすると、本当にこの家が飼っている悪魔なのかもしれない。だが、我々の目的は奴がどんな者でも変わりはない。奴を殺せばそれでいいのだ」

信玖人義は、通信機にそう語る。

相手は何も言わない。というより、一方通行の通信機だからだ。

「奴が銃撃を避けると言うのなら、避けられない状況を作れば良い。奴が消えるように移動すると言うのなら、出て来たところを叩けば良い。奴が影分身のように分裂するなら、本体を殺せば良い」

信玖人義は、まるで全てを知り尽くしたように語る。

「奴の行動は、必ず何かのためだろう？ それならば、容易く足止めできよう。そして、彼女なら容易く仕留められるだろう」

「白雪お嬢様なら」

＊

狗と呼ばれた人影は、既に屋敷に背を向けていた。

そこは、屋敷唯一の出入り口である、絢爛さと威厳さを兼ね備えた門の外側。

影分身を『悪魔』達が追いつめている間に、人影は堂々と門をく

ぐった。

人影は、裏切り者と呼ばれ殺されそうになったことに驚きはしなかった。

むしろ、それは遅すぎるくらいだと思っていた。

人影は自分の影へと呟いた。

「僕は……裏切り者だ。殺されても、何も言えない。だが、簡単に殺されるわけにはいかない」

影は答えた。

「……お前は裏切った。他でも無い、お嬢様の命令を。だが、お前は悪くない」

影に白い歯をこぼすような笑みが浮かぶ。

「悪魔だから、最初から俺が悪い」

「……なんだよそれ」

人影は小さく笑い、正面を向き屋敷から遠のいた。
そして??。

「先輩！」

人影の動きが、止まった。人影は、驚いていた。

目の前の暗闇に、一人の少女がいた。

「……先輩、ですよね？」

人影は黙る。

このタイミングに合わせるように、雲が切れ、そして、月明が少女の手元を照らした。

「先輩……」

銃口が、人影にピタリと向けられていた。

*

大臣は白雪に裏切り者の殺害許可を申し出た。

「お嬢様、奴は裏切り者です。強盗事件、奴は犯人達を殺害しました。お嬢様の望んだ処罰、裁判にかけ法的な処罰を下す事は叶いませんでした。お嬢様の決断を踏み躪ったも同然です」

「……そんな」

「《国舞島》での事件、奴はテロリストの殺害にとどまらず、まだ生きていた科学者達も殺害しています。未来の技術の向上どころか、現在を生きている者の命すらも奪いました」

「……」

「奴は、お嬢様を侮蔑しています。奴のお嬢様への反逆行為を、我々は許せません。……お嬢様、どうか奴の処罰、場合によっては殺害の許可を」

「……」

「このままでは、奴の殺戮の手に民衆までもが巻き込まれてしまいます。奴がまだ組織にいる間に、処理をしなければ」

白雪は俯き、そして言った。

「……少し、考えさせてください」

だが、大臣は譲ろうとしない。

「お嬢様！ 奴をこれ以上野放しにすることは危険です！ 奴は、月夜様をも？？」

何かを言いかけ、大臣は急いで口を抑えたが、しかしもう遅かった。

「月夜？ …………… お父様が、どうしたんですか？」

「……」

途端、饒舌だった大臣の口が動かなくなる。その反応だけで、もう全てが伝わっていた。

だが、白雪は聞かないわけにはいかなかった。

「大臣！ 言ってください！ これは、命令です」

大臣は渋るように暫し目を泳がせたが、観念したのか、小さく言った。

「奴が……月夜様と最後に会ったのです。……それ以後、誰も月夜

様を見てはいないのです。そして、その二人がいた場所には争ったような跡と……月夜様の血痕が」

白雪は、もう大臣の顔を見てはいなかった。大臣に背を向け、白雪は言った。

「……………明日。……私が許可を出したら、いいです」

大臣が部屋を出て行くのと、白雪が涙を流したのは同時だった。

*

銃口を向けたまま、白雪は叫ぶように言った。

「先輩……、どうして何も言ってくれないんですか？ どうして何も言ってくれなかったんですか？ ……私は、そこまで信用できない女ですか？」

白雪は俯きながら、言葉を紡ぎ出す。必死に、嘘に縋り付く想いで。

「私は、先輩のことをまだ信じてますから」

その言葉に何かを思ったのか、人影は自身の顔に手を添え、仮面を外すように手を払った。

そして、

「白雪。お前は、優しすぎだよ」

人影の顔を覆っていた黒色が塵のように夜の闇の中に消え、ミトはニツと唇を歪めていた。

「その優しさが身を滅ぼすとも知らずにさ」

そのミトの顔を見て、白雪の表情が一瞬こわばり、銃を構える手が、微かに震えた。

白雪は声を震えさせ、怒りと悲しみに染まった声で訊いた。

「……先輩。今までのことは、……全部嘘だったんですか？」

ミトは黙っている。

沈黙は物語る。

「強盗事件、先輩は間違っていないと言いました。でも、先輩は犯人を殺しました。《国舞島》の事件、先輩は私のことを優しいと言いました。でも、先輩はテロリスト共々科学者も殺しました」

ミトは黙っている。

だが、黙秘の意味はなかった。

「先輩。私はそのことに関してなら、許すつもりでした。でも、そして、叫ぶように白雪は言った。

「どうして、私のお父さんを殺したんですか？」

「……………」

ミトは黙ったままだった。

黙ったままでも、全てを物語り、黙秘権を行使した。

白雪は目を瞑り、そして言った。

全てと決別するための序章を、彼女は口に出した。

「……そうですね。私は間違っていないせんし、優しいのかもしれない。でも、先輩は間違っています。優しくもありません。だから??？」

*

ここが、線の引きどころかもしれない。

白雪に銃を向けられても、僕は酷く冷静に、そんなことを思っていた。

所詮、僕と白雪は身分どころか人間としても違っていたのだ。

白雪はお嬢様で僕の主、僕はその飼う狗の悪魔。

解っていたことだ。

早いか遅いかの違いでしかない。この結末は、変わらないだろう。それなら、僕は??。

「白雪。僕は僕の行いを間違っているとは思わない。全ては、白雪のために。これが僕の正義だ。だが、それをお前が間違っていると言うのなら、僕は素直にそれを受け止め、断罪を受け入れよう」

白雪は少しだけ視線を上げた。

だが、希望など無い。あるのは、絶望だけだ。

「だが、白雪以外の誰かの台詞を受け入れる気は無い。僕はここから落ち延び、勝手に今までの行いを続けるだけだ」

白雪の視線が、また下がった。

僕は引くつもりはない。

白雪、お前はどうか？

僕の人生の終わりを告げる幕を、僕の命の灯火を吹き飛ばす引金を、引けるか？

白雪は、視線を上る。そして、僕を見据えて言った。

「ごめんなさい」

白雪は、その頬を涙で濡らしながらそう言った。

ああ、ついに泣かせちゃったか。だが、最初から解かっていたことだ。

僕が最初に裏切ったその時から、いつかはこうなると解かっていた。

いや、もしかすると僕は、白雪のこんな表情を見たかったのかもしれないな。

だって、そうじゃなきゃ、なんで僕は笑っているんだよ。

白雪の手元が、引金に掛けた指が小刻みに震える。

僕は??????、

「????????」

銃声が木霊し、『悪魔』の血が舞った。

＊

「……咲」

そこには、まだ彼女とその側近しかいない。

正確には、そのすぐ側には死んだ『悪魔』がいたが。

他の『悪魔』達はまだ、そこには来ていない。

「なんででしょうか、お嬢様」

咲は極めて冷静に主人に尋ねた。

「……彼を、家族の元へ返してあげてください」

咲は少し驚いた顔をしたが、しかしすぐに頷く。

「お嬢様は、人が集まる前に屋敷に戻ってください。私は、運ばなければいけません。今日中には戻れませんが、大丈夫ですか？」

「……ええ。大丈夫です」

白雪を部屋に送り、咲は姿を消した。

部屋には、白雪一人となった。

「……先輩」

そして、白雪奈美は行方を晦ませた。

七月七日、七夕。

織り姫と彦星が年に一度だけ出会うその日。

一匹の『悪魔』の死は、記録されることは無かった。

ただし、この翌日、七月八日はこの国の一つの事件の日となる。

国主、白雪奈美はその権利を放棄し行方不明になる。

そして、その翌日、すぐに新たな国主は決まった。貧困層からの圧倒的な指示を得て、その男は国主になった。

その翌日、七月十日には新たな国主、信玖人義の政治が始まっていた。

白雪家の飼っている悪魔、その噂も白雪家の権力が失われるにつれて、消えて行った。

『悪魔』の死は、世間に知られることなく闇に埋もれて行った。

第三章 く終わりに始まりく（後書き）

一遍書き直したのでここで止めます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0584n/>

悪魔と愛の模様

2010年10月8日12時17分発行